

非営利法人ニュース

2018年
2月号
Vol. 61



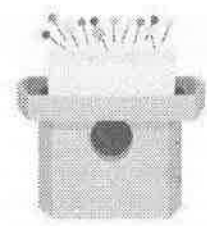
発行 公益総研 非営利法人総合研究所
東京都港区新橋6-7-9 新橋アイランドビル
TEL 03-5405-1811 / FAX 03-5405-1814
編集協力 (特非)国際ボランティア事業団・(公財)公益推進協会・NPO法人設立運営センター

★★ お勧めセミナー情報 ★★

【1】NPOが得か？社団が得か？法人設立セミナー

*どの法人格が向いているのか、メリットとデメリット・税制の違いなどを説明

- 講師 福島 達也
(田園調布学園大学講師・(特非)国際ボランティア事業団 理事長)
- 日時 2018年2月21日(水)
午後2:00~4:00(受付1:45~)
- 会場 東京都港区新橋6-7-9 新橋アイランドビル1階会議室
(新橋駅烏森口より徒歩8分・御成門駅より徒歩5分)
- 定員 先着8名まで 徹底指導(最少催行人数3名)
- 受講料 3,000円(1名分・税・テキスト代含む) *事前振込



◎情報満載！今月のもくじ◎

セミナー情報	1
遺贈の窓口情報	1
事務代行のご提案	1
非営利法人関連情報	2.3
CEOコラム	4
編集後記	4

★★ 遺贈の窓口からのお知らせ ★★

●相続する人がいない、または相続人が放棄したお金は、すべて国に没収となります。その額、毎年400億円を超えています。しかし、遺産を社会的に有意義な事業に使うと、という気持ちを遺言書に残しておく、法律にもとづく法定相続に関係なく、ご自分の意思を生かすことができます。この遺言による財産寄付を「遺贈」といいます。公益財団法人公益推進協会では、「自分の名前をつけた基金」を作る遺贈によるご寄付を承っております。死後、ご自分の財産を自分の名前の基金に変え、自分の考える公益的な社会貢献活動に役立ててほしいとお考えでしたら、ぜひ、遺言書を作成し、受取先を「公益財団法人公益推進協会」とご指定ください。また、公益財団法人公益推進協会では、金融資産をはじめ土地・家屋などの不動産や株式、美術品などのご遺贈も承っております。そして、一番大事なことですが、基金に関する詳細は、すべて内閣府に報告され、基金の保全が図られます。

☆セミナー申込方法☆

【1】NPOが得か？社団が得か？法人設立セミナー

→特定非営利活動法人
国際ボランティア事業団
TEL 03-5405-1813
FAX 03-5405-1814
メール npoinfo@iva.jp

■必要事項

- ①参加日
- ②参加者氏名
- ③団体名
- ④案内送付先郵便番号、住所
- ⑤電話
- ⑥ファックス
- ⑦メールアドレス

以上

職員ゼロ時代ついに到来か？ 公益総研から事務代行のご提案！

- 公益総研 事務センターは、法務や税務のスペシャリストでありながら、低価格で、公益法人、NPO、NGO、学会、研究会、各種団体等の事務局運営を代行いたします。もう事務局の件数や家賃等の心配はいりません。
- わずらわしい日々の会計業務もすべて含まれておりますので、わざわざ月々何万円もかけて税理士等に毎月の記帳会計を依頼する必要もありません。
- 運営に欠かせない学会誌や広報誌、名簿などの制作、WEBサイトの制作なども同時に依頼いただけますので、迅速かつ効率的な事務局運営が可能です。
- 登記する場所が必要な場合は、弊社内に登記することもできます。登記可能な都市は、東京都港区・大阪府大阪市福島区・福岡県福岡市博多区などです。

☆遺贈の窓口からのお知らせ

公益財団法人公益推進協会
TEL 03-5425-4201
FAX 03-5405-1814
メール info@kosuikyo.com
HP http://kosuikyo.com

☆事務代行のご連絡先☆

公益総研株式会社
TEL 03-5405-1811
FAX 03-5405-1814
メール souken@iva.jp
HP : http://www.iva.jp/nposouken/

★非営利法人関連情報★

NPOが教育クーポン配布　市も協力

貧困や教育など子供を取り巻く問題に取り組む関西のNPOなどが、来年度から「子ども・若者応援クーポン」を無償配布する。同市内に住み、生活保護受給世帯などの0～20歳約200人が対象。市内100カ所以上の登録店で、子育てや教育に関わる幅広いサービスに利用できる。クーポンを発行するのは一般社団法人コレクティブ・フォー・チルドレン（尼崎市南塚町2）。日本財団から年1億円の助成を3年間受けて実施する。市はPRなどに協力する。（毎日新聞 1月26日）

乗り合いタクシーNPOにふるさと大賞

熊野市で公共交通機関の空白地を埋める乗り合いタクシーを運行する特定非営利活動法人NPO法人のつてこらいが、総務省の平成29年度「ふるさとづくり大賞」大臣賞に選ばれた。高齢者の「足」として定着しており、同省は地域住民が持続可能な事業を確立したと評価。「住み慣れた地域で安心して住み続けることができる」取り組みだとしている。
のつてこらいは、過疎化が進む同市五郷町で、平成22年に設立された。県内で初めて過疎地有償運送（現・公共交通空白地有償運送）制度を活用。運営費確保のため、利用者からの会費や運営収入のほか、インターネットを通じて広く資金を募る「クラウドファンディング」も取り入れた。毎年の予算編成に制約される行政からの補助金に依存していないのが特長だ。自家用車を持たない高齢者らの通院や買い物の足として定着しており、総務省は「他地域と同様の取り組みをしている団体に参考例として紹介したい」としている。
ふるさとづくり大賞は、総理大臣賞、総務大臣賞で計28団体と4人が2月3日に東京で表彰を受ける。（産経新聞 1月25日）

外国人観光客に一般家庭紹介NPO活躍

日本を訪れる外国人観光客が一般家庭でくつろげるようマッチングに取り組んでいる港区のNPO法人「Nagami Visit」が、国際交流基金の本年度「地球市民賞」に決まった。宿泊はせず、数時間の交流を楽しむという気軽さで、受け入れ家庭が増えているという。この取り組みは「ホームビジット」体験。外国人観光客が、一般家庭で食卓を囲んで2～3時間、交流する。同法人が、年間3000円の会費を払って登録したホストをゲストに紹介している。ホストは、食卓の材料費としてゲスト一人当たり1500円を受け取る。NPO法人は2011年に設立。ホストは42都道府県で900組が登録している。設立した年のゲストは約180人だったが、2016年10月からの一年間では延べ1500人以上が利用した。約4年半で43回の受け入れをした千葉県我孫子市の小川奈緒子さん（44）は「一緒に海苔巻きを巻いたり畑で野菜を収穫したり、普通のことを喜んでもらえる」と話す。同じゲストが二度やって来たり、ゲストの家を訪ねたりと交流が深まっているという。「言葉は要らないと思う。楽しいです」と笑顔を見せた。同法人の楠めぐみ代表（36）は「宿泊はしないで気軽だし、『同じ釜の飯を食った仲』ということで対等の友人関係ができる」と言う。2020年東京五輪・パラリンピックを前に「ボランティアは救済が高いが、何かしたい」と登録するケースが増えており、「観光だけでなく触れ合いが生まれれば」と話す。地球市民賞は国際交流基金が、文化芸術や多文化共生、市民連携などをさまざまな方法で地域レベルの国際交流を進める団体を顕彰する賞。1985年から昨年度までに100団体が選ばれた。副賞として200万円が贈られる。この他の受賞団体は芝園団地自治会（埼玉県川口市）、黄金町エリアマネジメントセンター（横浜市）。（東京新聞 1月25日）



復興目的なら返礼率4割OK？　草津町

草津白根山（群馬県草津町）の噴火による観光業への影響を減らそうと、同町の黒岩信忠町長は1月29日、災害復興に使う目的で寄せられたふるさと納税の返礼品として、町内の温泉旅館などで使える感謝券を、寄付額の4割分の金額で贈ることを明らかにした。返礼品については、総務省が昨春、寄付額の「3割以下」と各自治体に通知しており、町も感謝券を3割で贈っていたが、黒岩町長は「今回は災害のため、特別にあたる」との見方を示している。期間は3月末までの予定。黒岩町長は「多くの人に草津に来てもらい、町内で宿泊したり、買い物したりする観光客が増え、町をにぎやかにすることが目的」と述べた。（朝日新聞 1月29日）

子育てに木材活用　NPOと協定結び宣言

埴町は1月22日、子育てや文化活動、産業振興に、積極的に木材を使用する「ウッドスタート」を宣言した。同日、東京おもちゃ美術館を運営するNPO法人芸術と遊び創造協会（東京都）と協定を結んだ。町内の埴農村協労働福祉会館で調印式を行い、宮田秀利町長とNPOの馬場清事務局長（副館長）が署名を交わした。調印式に2017年4月以降に生まれた乳児と家族が招待された。宮田町長が児玉達さん（32）と長女で7カ月の二葉ちゃんら親子4組に県産ヒノキを使った町オリジナルの誕生祝い品「花のつみき」をプレゼントした。町は祝い品の贈呈をはじめ、木育をテーマとした子育てサロンや林業、木材産業の人材を集めた会議などを通じて町ぐるみで木との関わりを深める。県内では埴町・飯館村、国見町が宣言している。（福島民報 1月23日）

3年前の自分から手紙　鳴門のNPO

預かった手紙を1～5年後に届けるサービスを行う「NPO法人花見山　心の手紙館」（鳴門市鳴門町土佐泊浦）が、東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県陸前高田市の小中学生から預かっていた手紙665通の発送準備を始めた。思春期の多感な時期に被災した生徒たちが書いた「3年後の自分や街へのメッセージ」が震災から7年となる3月11日までに本人の元へ。3年前、陸前高田市の副市長だった久保田崇さんが、復興事業を通じて知り合った心療内科医の女性から手紙館の取り組みを伝え聞き、手紙が持つ力に賛同して各小中学校に提案。市立第一中や高田小など7校、65人が利用することになった。同館は3年間無料で預かることを決め、専用の便箋と封筒のセットを送付。生徒たちは「3年後の自分に向けたメッセージ」「どんな街になってほしいか」などをテーマに思いをつづった。手紙館は3年間、耐火キャビネットで大切に保管してきた。2月上旬までに陸前高田市教委へ発送し、各住所に送られる。住所が変更となって戻ってきた手紙は、市教委の担当者が探して本人の元に届けるという。発送準備を始めた1月25日、同館長ら3人がキャビネットから手紙が入った段ボールを取り出し、保管されていた手紙に、一つ一つ丁寧に切手を貼って配送の準備を進めた。3年前、手紙を受け取りに第一中を訪ねた同館アドバイザー、中野シゲ子さん（66）は「手紙は、読んだ時に思いが深まる。3月に生徒の元に手紙が届いた時、当時のさまざまな思いや自分へのエールを思い出して、また一歩一歩前を向いて前進していったら」とほほ笑んだ。手紙館は、自身や大切な人に、日常では伝えられない思いを手紙につづってもらおうと2013年3月に開館。今では県内外から多くの人を訪れている。18年1月現在で、約6000通の利用があった。（毎日新聞 1月27日）

* 内容に関しては、問合せ先に直接問合せをお願いします

奈良市職員が余った食品寄付

奈良市は1月25日、職員が家庭で余った食品を持ち寄って生活困窮者らに寄付する「フードドライブ」を町役所で初めて実施した。集まった食品は、27日に開かれる「フードバンク奈良」設立記念セミナーで、同バンクに贈られる。この日は職員37人が米やインスタントラーメン、フルーツの缶詰のほか、食用油や調味料など家で余った食品を紙袋に入れて持ち寄った。市福祉政策課によると、市内の家庭系可燃ごみのうち、手つかずのまま捨てられた食品は平成27年度は推計919トン、28年度は1385トンにも上ったという。パスタや缶詰を寄贈した地域福祉課の榎谷美貴子さん（32）は「家で眠っていたものが困っている人の役に立てばうれしい。活動ももっと広がればいいと思う」と話していた。福祉政策課の早瀬宏明課長は「食品ロスを減らし、貧困家庭も支援できることは環境、福祉の両面から見てもいい活動。今後は市民にも活動の裾野が広がるよう推進したい」と語った。（産経新聞 1月26日）

希少な蝶の舞う街づくりめざすNPO

チョウの舞うまちづくりを進めようと、小松市のNPO法人「みどりのこまつスクスク会」が、JR小松駅前のこまつの杜で、さまざまなチョウを根付かせる活動をしている。餌の草花を移植したり、幼虫を放して羽化させたり。今年には環境省のレッドリストで絶滅危惧2類に指定されているギフチョウの飼育に挑む。NPO法人は建設機械メーカー大手「コマツ」OBで活動は会員の25人が昨春から始め、今年に入って「花と蝶飼育観察チーム」を設立した。昨夏には光沢のある黒い羽が特徴のジャコウアゲハの定着に成功。昨秋には最長2000キロの距離を移動する渡りチョウで知られるアサギマダラの飛来を確認した。チームが育てるジャコウアゲハの食草「ウマノズクサ」は県レッドデータブックで絶滅危惧2類、アサギマダラ用の「フジバカマ」は環境省レッドリストで準絶滅危惧種に指定されている。活動はチョウを増やすだけでなく、貴重な植物の保全にも役立っている。4月には、昨春植えたギフチョウの食草「カンアオイ」の葉に幼虫を放ち、羽化に挑戦する。同じ時期に成虫が蜜を吸うカタクリも植えて準備してきた。また、ジャコウアゲハとアサギマダラの観察会をそれぞれ六月と九月に初めて開く。（中日新聞 1月26日）

徳島市でネーミングライツ　動物園など8施設

徳島市は行政改革の一環で新たな収入を増やすため、ネーミングライツ（施設命名権）制度を導入する。とくしま動物園や市立図書館など市民に身近な8施設が対象。愛称の名付け親となる県内の民間企業やNPOなどを来月16日まで募集している。新名称の使用は4月1日から。期間は5～7年で、利用者数や通行量の多さを基準に命名権料を設定。利用者が最も多いれあい健康館（年間57万人）は年間500万円以上を希望している。県内2本社や支社など活動拠点がある企業や社会福祉法人、NPOなどが応募できる。選定委員会が契約する法人を決める。市税収入の落ち込みや社会保障にあてる費用の増加で、市の一般会計はこのままの財政運営が継続した場合、2021年度には約6億円の財源不足に陥る恐れがある。8施設の命名権契約で、年間1695万円の収入となる。ネーミングライツは県が07年に導入。16年度は球場や歩道橋、剣山頂トレイルなど17カ所で約5000万円の収入があった。一方、北島町は昨年、体育館とプール命名権者を募ったが応募がなかった。「応募ゼロ」を避けるため、市管財課は経済団体などに協力を呼びかけている。「法人には地域貢献のPRになる。市民が親しみやすい名前を期待したい」としている。（毎日新聞 1月26日）

子供たちに忍者修行　日田市NPO

日田市のNPO法人日田子ども劇場による「キラリ☆日田っ子プロジェクト」のメインイベント「忍者まちを走る！」が豆田町一帯であった。市内の小学生約40人がミッションをこなしながら、歴史情緒ある町などで忍者修行に臨んだ。子どもたち遊びを通じて古里や町の歴史を知ってもらおうと企画。年賀寄付金配分事業（約100万円）を活用し、昨年末には日田の歴史を学んだ他、火おこし体験、町町の散策など歴史文化を体験してきた。NPO法人あそび環境Museumアフタフ・パーバン（東京都）のメンバーらが導入劇を披露し、頭心の心得などを指導。児童らは班ごとに分かれ、頭巾をかぶった忍者姿で町へ飛び出した。ヒントを基に町内の15店舗で道場主役の店長や店員を探し出すのがミッション。児童らはメンバー扮する“黒忍者”に見つからないよう探索し、課題をクリアした。チャンバラ遊びも体験した。井上怜君（12）＝光岡小6年＝は「頭巾をかぶるのが難しかったけど、みんなとクリアを目指すのが楽しかった」と笑顔。子ども劇場の担当者は「人とのおふれあい、想像力の中で仲間と遊び合う良い機会になったのでは」と話していた。（大分合同新聞 1月28日）

懲りないNPO会計担当　着服で逮捕

NPO法人の預金を着服したとして、横浜水上署は1月18日、横浜市港北区篠原町、アルバイト、佐々木晴修容疑者（55）を業務上横領容疑で逮捕した。逮捕容疑は、NPO法人「まちづくり情報センターかながわ」で会計担当理事をしていた2014年2～4月に8回、同センター名義の預金から、現金計約300万円を引き出し、横領したとしている。生活費などに使う目的だったといい、「身勝手な都合で横領した」などと容疑を認めている。
同署によると、佐々木容疑者は13年9月に会計担当理事に就任。経理事務に従事し、通帳やキャッシュカードも管理していた。14年9月に使途不明金が見つかり横領が発覚。同センターは同10月に佐々木容疑者を解任し、同署に告訴していた。佐々木容疑者は15年にも会計担当だったNPO法人「神奈川子ども未来ファンド」から約700万円を横領したとして告訴され、同署が捜査している。（毎日新聞 1月19日）

NPOがザンビアで医師の心臓手術指揮

アフリカ南部・ザンビアで心臓外科医の指導、育成活動に取り組む吉野川市のNPO法人TICOの医師らが1月30日から現地に出向き、ザンビア人医師による心臓外科手術を指揮する。昨年11月に心臓血管手術を成功させたのに続いて、今回お心臓の一部に先天的に開いた穴を閉じる心房中隔欠損（ASD）閉鎖手術を初めて行う計画。より高い技術の習得を支援、同国の医療環境の向上につなげる。スタッフの松村武史医師（46）、四国こどもとおとなの医療センター（香川県善通寺市）の江川善康医師（64）と、看護師、医療装置の操作や保守点検を担う臨床工学技士各1人の計4人が30日から2月16日までの18日間、首都ルサカにあるザンビア大学付属教育病院を訪れる。手術に必要な人工心肺装置も持ち込む。ASDは左右の心房を隔てる壁に穴が開く先天性疾患。100人に1人程度の割合で発症し、重症化すると心不全を起こして死亡する場合もある。穴をふさげれば完治するが、ザンビアには手術をできる医師がおらず、手術を受けられず命を落とす人も多いという。滞在中に計4例のASD閉鎖手術を実施する予定。育成プログラムのリーダーを務める松村医師は「現地医師に手術を成功させて自信を付けてもらい、ザンビアの心臓外科医療を担う中心的な人材に育て上げたい」と意気込んでいる。（徳島新聞 1月29日）

半身まひ回復の男性　“自立支援”講演

不登校や引きこもりなど若者の自立支援をテーマにした講演会が神崎市で開かれ、半身まひを乗り越えた男性が「支援に変化が必要」と訴えました。「今日ある命が明日またあるということが当たり前になりすぎてしまっている」長野県出身の長岡秀貴さん44歳は高校時代、左半身のまひから奇跡的に回復。命の大切さを痛感し、不登校の子どもなどを支援するNPOの教育施設を地元で設立しました。1月28日はそのつながりで佐賀市のNPOから講演会に招かれ、長岡さんは「若者の自立を支援するには根本の考え方を変える必要がある」と訴えました。さらに「学校へどうやったら戻れるんだろう？君が学校に行けない原因って何だろう？ではなく、その子の人生をどうやってマネジメントしていくのか。入口の支援「変化球が必要」また、「不登校の経緯など過去の議論は極力せず、できるだけ未来を変えるために時間を使うことが自立支援につながる」と教育のポイントを語っていました。（佐賀テレビ 1月28日）

NPOが沈没した戦艦発見か？

太平洋戦争の激戦地・ガダルカナル島沖で沈んだ戦艦「比叡」を海上からソナーで捜索していた東京都内のNPOが、同島沖の海底で、隆起物を発見した。専門家は「周囲の地形とは明らかに異なり、艦船の可能性がある」と指摘しており、同NPOは今後、水中探査機を投入してさらに調べていきたい考えだ。
日米両軍が激突した同島周辺海域は、多数の艦艇が沈んだことから「鉄底海峡」と呼ばれている。比叡は1942年11月の「第3次ソロモン海戦」で、米巡洋艦などの砲撃戦で大破し、漂流した後に海中に没したため、詳細な沈没地点は今も謎という。
捜索しているのは、都内で水中探査会社を経営する池田克彦さん（71）らでつくるNPO「アジア太平洋英霊顕彰会」。同NPOは、比叡が最後に確認された海域や潮の流れなどから、沈没地点を同島北方約10キロの周辺海域と推定。昨年11月13～24日、ポートに取り付けたソナーで海底を探索した。（読売新聞 1月29日）

記事差し替りに批判　IPS論文不正問

京都大IPS細胞研究所（山中伸弥所長）の論文不正問題について、共同通信が、山中氏が論文を掲載した科学誌の創刊に関わったことを問題視するようにも読める内容の記事を配信後、同じアドレスで別の内容の記事に差し替えた。ただ、読者に経緯の説明がなかったことから、批判も出ている。共同通信は1月25日午後、「山中氏、科学誌創刊に深く関与か」との見出しの記事を配信。「問題の論文を掲載した米科学誌の創刊に、山中伸弥・研究所長が深く関わったことが分かった」との書き出しで、創刊時の山中氏のコメントなどを引用した。この記事に対しては、ツイッターなどで、山中氏が科学誌の創刊に関わったことと論文不正との関係について「ミスリードの内容だ」といった批判が相次いだ。共同は同日夜、同じアドレスで「山中所長が給与と全額寄付」との見出しで、山中所長が給与を全額寄付することを紹介した記事を配信。ほほ別の内容の記事に差し替わった。だが、こうした経緯の説明などがなかったことから、記事を紹介した同社公式アカウントのツイートが26日午後8時の時点で900超のリツイートされ、「何の謝罪もなく記事をなかったことにしようとしている」「訂正や謝罪はないのか」などの批判が上がった。同じアドレスで記事の内容が大きく変わった理由などについて、共同通信は取材に対し、「新たな要素を加えて記事を差し替えました。編集上、必要と判断しました。その他についてはお答えは控えさせていただきます」（朝日新聞 1月26日）

姫路の名産に　NPOが料理教室

姫路市総社本町の市民会館で1月28日、ピーツを使ったロシア料理教室が開かれた。日露戦争時のロシア兵捕虜が市内でピーツを育てたという逸話を基に、市の名産品に育てよう活動するNPOが主催。ロシア人講師の指導で、主婦や食品会社関係者ら約30人が家庭料理作りにも挑戦した。「捕虜たちの赤かぶら」（三木治子さん著）に、捕虜が市川の河川敷でピーツを育てたことが記されている。市内のNPO「姫路タウンマネージメント協会」がこれに着目し、昨年からは市内でピーツの育成に取り組んできた。（毎日新聞 1月29日）

不登校の子支援でまんが図書館開設

不登校の子どもを支援する浜松市東区のNPO法人「ドリーム・フィールド」がこのほど、同区天龍川町の事務所敷地内に「子どもマンガ図書館」を開設した。大山浩司代表（57）は「子どもたちが安心して訪れ、小さなSOSを発信できる居場所にしたい」と語り、気軽に利用を呼び掛ける。開設のきっかけは、不登校の女子中学生との出会いだった。少女が何よりも興味を示すのが漫画で、読み出すと一日中没頭した。大山代表は、少女の複雑な家庭環境を考えながら「彼女にとって漫画は現実逃避の一つの手段かもしれない」と感じた。「同じような子どもはきっとたくさんいる。こたわりなく学校になじめない子のいろんな受け皿があるべき。そこで成長の手助けを見つけたい」と建設を決めた。約10平方メートルの図書館には約3千冊の漫画が並ぶ。冒険やファンタジー、恋愛などジャンルはさまざま。クラウドファンディングで資金を募り、漫画購入費などの一部に充てた。大山代表は「漫画が学びのツールや心の支えになることもある。居場所の少ない子どもたちに、ふらっと寄って楽しんでほしい」と願う。開館は平日午前10時～午後6時。18歳未満なら誰でも利用できる。貸し出しは不可。（静岡新聞 1月19日）

島おこしNPOが子供受け入れ民泊

NPO法人いけま福祉支援センター（前泊専理理事長）は、高齢者が安心して「今日も楽しいね」と笑って暮らせる島づくりを目指す。事業は介護福祉に止まらず高齢者宅への民泊受け入れをコーディネートする「島おこし」事業など幅広く発展した。職員数は33人。島の雇用や経済活性化にも貢献してきた。高齢者が主役の「民泊事業」では、子供たちが漁や昔から伝わるみそ、豆腐、民具づくりなどを体験。高齢者たちの「マイアムクトゥ（生きる知恵、生きる力）」を土産に帰る。宿泊や体験を受け入れる高齢者には収入が入り、「島おこし」に役買うようになった。民泊事業は2011年に始まり、7年の間に7620の子供たちが来島した。経済効果は6800万円に上る。「島おこし」活動では池田温原を再生してカーヌを浮かべながら野鳥を観察する計画や島中に木や花を植える緑化活動、「島の自治憲章検討」も視野に入れた。「シマ学校」は高齢者を講師に招き島の文化などを次世代（未来）につなぐ狙いでつくった。前泊理事長は「島の資源は島で生き続けてきた高齢者と、島の暮らして育まれた知恵、経験、技、そしてツムチャイ（助け合う心）」です。「心」、『人』、『物』が循環する島を目指したい」と話した。NPO法人いけま福祉支援センターは全国の子供たちの民泊受け入れが認められ、2012年に読売福祉文化賞を受賞した。2015年にはWHO（世界保健機関）主催の第3回アジア太平洋CBR会議（東京開催）に合わせ、日本のコミュニティー再生の実践例に選ばれ、会議で活動を紹介した。（宮古毎日新聞 1月27日）



「同じ行動すれば成功できない??」



公益総研株式会社 主席研究員兼CEO
公益財団法人公益推進協会 代表理事
(特非)国際ボランティア事業団 理事長 福島 達也

昨日は久しぶりに東京も大雪だった。といっても、最大で積雪20センチということなので、北海道や東北に比べたら大したことはないかもしれないが、それでも東京で20センチというのは大騒動なのだ。まず交通が乱れる。人が滑って転ぶ。車はあっちでもこっちでも事故だ。

会社なんて、雪と聞いただけでビビってしまい、すぐに早退命令の嵐。ということで、昨日の夕方は、朝晩のラッシュアワー以上の人が帰路に殺到して、またまた大混雑。東京の雪の風物詩は本当に情けないほど、ドタバタ劇なのだ。

弊社もさすがに早退命令を出したが、なぜ人は雪の時に帰路を急ぐのか？

急げば急ぐほど大混雑して、電車が止まったり、駅が入場を制限したり、いいことはないとなぜ気が付かないのだろうか？以前コラムで取り上げたB層の人たちも間違いなくそういう行動をとるだろう。

だが、頭の良い人は、こういう時こそ夜の店に繰り出すだろう。一杯飲んで歌って、いい気分になったところに帰路につけば、電車もスカスカで、すぐに帰れるのだ。

あの東日本大震災の時のいい例だ。国民のほとんどは、帰ろうとしてパニックになり、歩いて5時間も6時間もかけて大混雑の国道をただひたすらに歩いたり車に乗ったり、寒さと怖さに耐えながら夜中にやっと帰路に着いたはずだ。

しかし、あの日、私の友人は帰路をすぐにあきらめ、ホテルもいっぱいだったので飲みに出かけたらしい。あんな日でもやっている店は数件あり、そこで朝まで飲むつもりだったとか・・・ところが夜中近くに新幹線が出るということが分かり、さっと乗車して横浜まで30分程度で帰れたというのだ。ちょうど家に着いた頃、夕方必死になって歩いて家路を急いだ人と一緒になったそうだ。嘘のような話ではあるが、実はこれが人生の縮図なのだ。

人生には、みなと同じ行動をした場合、決して幸せにならない(秀でることはできない)という法則があるのだ！

特に芸術家や文化人、スポーツ選手やクリエイターは決してほかの人と同じ行動をとらない。

実は私も小さいころから今まで、人と同じことをしないように生きてきた。小学生のころ、周りはみな「ジャンプ」という漫画を貪るように読んでいたが、私は一度も読んだことがなかった。同じく、小さいころから「紅白歌合戦」は見たことがないし、初詣にも行かなかった。さらに、行列には絶対に並ばなかったが、それは「疲れる」とか「面倒くさい」のではなく、みなに興味を示すと自分の興味がなくなる性格だからだ。ひねくれているのではない！

私だけではない。ほとんどのクリエイターや成功している経営者は、子供のころからどこか「変わり者」だ。もちろん、私は決して成功しているとは言えないが・・・。伝記を読んで、テレビの偉人伝や回顧録を見ても、大概はそういう人だろう。

なぜなのだろうか？

そう！ そうしないと、良いアイデアは生まれないからなのだ！

みなと同じことをしていると、みなと同じ発想となり、抜きん出たアイデアや新しい発想は生まれれないのだ。

世界各国でも、同じような現象が見られるようだが、特に、日本では、「右にならえ」と言わんばかりに、みなと同じ行動をする人が圧倒的に多い。このような、みんなと同じ行動をすることを社会心理学では、「同調行動」というらしい。同調行動には「自分の意志とは関係なく多数派の行動を真似する傾向」がある。

5人で居酒屋に行き、1杯目はハイボールにしようと思ったとする。しかし、他の4人がビールを頼むと、ハイボールと決めた人も「やっぱり私もビール」となることが多い。これが多数派の行動を真似する同調行動だ。

また、「自分の意志とは関係なく親密な人の行動を真似する傾向」もある。憧れの先輩がよく使う言葉を無意識的に使ったり、好きな芸能人が着ている洋服の傾向を好きになったりする経験をお持ちの方もいるだろうが、それが「親密な人の行動を真似する同調行動」だ。

日本人が同調行動をするのは、「農耕民族だったから」「島国だから」「戦後の教育体制」など根拠となる背景には諸説あるが、長いものにまかれるのは古くからの日本人の特徴のひとつかもしれない。

しかし、それでは、自分らしさを殺しているだけではなく、成功の鍵をみすみす逃していることと同じなのだ。

なので、成功するには、それを克服しなければならないのだが、方法は下記の3つだ。

1. そういう環境に近づかない
2. 情報を遮断する
3. ストレスを溜め込まない

以前のコラムで紹介した、日本をダメにした「B層」にならないための方法でもある。

まず、はじめから同調圧力を感じる環境に近づかなければ、プレッシャーを感じることはない。そういう環境から思い切って関係を断つか、距離を置くようにすればよい。

そして、テレビの電源を抜き、新聞をやめることも重要だ。無条件に入ってくる情報というのは、「周囲の人がやっている」というプレッシャーになるからだ。さらに、環境を変えることが難しい人は、ストレスを溜めない方法を見つけよう。信頼の置ける友人に話を聞いてもらうなど、ストレスを感じる現状を一人のためこまないことが大切だ。

実は私のコラムは以前から、読者が同調行動をとらないように少しずつ成功の道に誘導していることに気が付いただろうか？

だって、ほとんどの人はこのコラムを読んでいないという行動に同調することなく、あなたは読み続けているじゃないですか！！

編集後記

最近の鉄道各社では、季節に因んだこと(今頃なら受験生へのメッセージ等かもしれませんが)、車窓から見えるものや景色について社内アナウンスをしている車掌さんもいるそうです。私はまだ聞いたことがないので、一度ぐらいは聞いてみたいです。朝の混雑時は別として、電車での移動は嫌いではないので、電車に乗る楽しみが1つ増えました。そして、時間に余裕があるときは最後尾の車両に乗ってみたいと思います。

(たま)